

樋の上遺跡最新出土遺物展

～古墳時代後期から続く律令期集落跡の調査成果について～

発掘現場から
文化力
POWER OF CULTURE

会期：平成28年11月22日（火）～平成29年4月30日（日）
会場：熊谷市立熊谷図書館・郷土資料展示室（3階）

1 はじめに

平成26年度、市内三ヶ尻にあります樋の上^{ひのうえ}遺跡の範囲内で市道拡幅工事に伴う発掘調査が行われました。調査では、7世紀末から10世紀初頭までの竪穴建物跡を中心とする集落跡が発見されましたが、特に9世紀中頃以降の後半から10世紀初頭までの竪穴建物跡が多く確認されました。

このたびは、その最新の発掘調査により発見された集落跡の、主に竪穴建物跡から出土した遺物を展示します。この展示を通して、今から約1,300～1,100年前の三ヶ尻地域ではどのような暮らしがあったかなど昔に思いを馳せ、古代の集落について理解を深めていただければ幸いです。

2 樋の上遺跡と今回の発掘調査成果について

樋の上遺跡は、市西部の荒川左岸近く、櫛挽台地とその縁辺に広がる新期荒川扇状地にある微高地に立地する古墳時代中期から中世にかけての集落遺跡です。また、遺跡は、南の市立三尻中学校から今回の調査区を含む北の県立熊谷西高校付近にかけて南北に細長く、帯状に分布しています。

今回の調査は、遺跡範囲の北東端部において行われました。検出された遺構は、飛鳥～平安時代の竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡4棟、河川跡1か所、溝跡10条などのほか、中世に所属すると思われる掘立柱建物跡や土坑などです。

竪穴建物跡は、7世紀末～8世紀初頭が1棟、8世紀後半～9世紀初頭が2棟、9世紀代が1棟、9世紀後半（～10世紀初頭）が7棟、9世紀末～10世紀初頭が2棟、時期不明が4棟検出され、時期不明なものを除く12棟のうち、9世紀後半または10世紀初頭までに属するものが約6割を占め、さらに9世紀末～10世紀初頭に属するものまで含めると全体の約7割を超えるもので、この地区での集落形成の時期的特徴が見てとれます。時期別の分布状況を見てみると、最も古い7世紀末～8世紀初頭の第14号竪穴建物跡が最も西において、それ以前の竪穴建物跡と重複して所在し、これが集落の最北西端に位置



調査地点及び周辺遺跡分布図

します。次の時期の8世紀後半～9世紀初頭のものは、中央部にわずか2棟所在する状況です。そして、9世紀後半～10世紀初頭のものが、前2時期が所在する最も西と中央部を除くか所に所在し、この時期の集落は、前2時期の集落を避けた位置に営まれたこととなります。これは、意図的なものなのではないでしょうか。なお、カマドが設置された箇所を見ると、通常時期で共通した傾向が見られますが、7世紀末～8世紀初頭のものが西壁に北西の向きに設置されている以外、8世紀後半以降のものは、ほぼ東壁に北東の向きで設置されていました。

出土遺物は、^は土師器^{つぎ}甕^{かめ}・^{だい}台付甕^{かめ}、^す須恵器^{つぎ}坏^{わん}・^ら蓋^{かめ}・^か皿^{かめ}・^は甕^{かめ}・^は壺^{はち}・^{かい}鉢^{ゆう}、^{かい}灰釉陶器^{とう}坏^{わん}・^は皿^は、^は土師質土器^{つぎ}坏^{つぎ}、^ど土錘^{すい}、^て鉄釘^{てい}などが見られ、特徴としては、第7号^す土師器^{えき}坏^てから土錘が21点と多量に、第10号^す土師器^{えき}坏^てから須恵器の甕や伝世品と思われる磨製石斧が出土しています。なお、特殊な出土遺物として、第10号溝跡と呼称した集落の西限を示す水路跡から^{ふう}風字硯^じが出土しているほか、土坑・ピット・性格不明の^{ぼう}土師器^{すい}坏^{しや}から^{ぼう}紡錘車^{すい}が出土し、第14号土坑のものは石製、第76号ピット及び第12号性格不明遺構のものは、^す須恵器^{えき}坏^{つぎ}・^{わん}坏^{わん}の底部を転用して^{ぼう}紡錘車^{すい}にしたものです。

このたびは、多数出土した遺物のうち、第1・2・5・7・8・10・11・14号^す土師器^{えき}坏^て、第10号溝跡、第14号土坑、第76号ピット、第7・12号性格不明遺構の出土遺物を展示しました。

3 展示資料を出土した主な遺構について

(1) 第1号^す土師器^{えき}坏^て

A区の中央部北寄りにおいて、建物のおおよそ半分が検出されました。カマドは北東向きの壁の中央部に設置されていました。

遺物は、カマド前を中心に出土し、土師器甕・台付甕、須恵器坏・皿・壺、鉄釘などが出土しました。

時期は、9世紀後半と考えられます。

(2) 第2号^す土師器^{えき}坏^て

A区の北半において、建物の中央部が検出されました。カマドは、不明です。

遺物は、土師器甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器坏、鉄釘などが出土しました。

時期は、9世紀末～10世紀初頭と考えられます。

(3) 第5号^す土師器^{えき}坏^て

C区の中央部において検出されました。カマドは北東向きの壁の南寄り及び南東隅の2か所に設置されていて、互いは、作り替えの関係にあります。

遺物は、土師器坏（暗文坏含む）・甕、須恵器カマドは北東向きの壁の中央部に設置されていました。・埴・蓋のほか土錘などが出土しました。

時期は、8世紀後半～9世紀初頭と考えられます。

(4) 第7号竪穴建物跡

C区の北端付近において、建物の一部が欠ける形で検出されました。カマドは北東向きの壁の中央部に設置されていました。

遺物は、建物全体に広がり出土し、土師器坏・甕・甑・台付甕、須恵器坏・蓋・甕・長頸瓶、多数の土錘などが出土しました。

時期は、8世紀後半～9世紀初頭と考えられます。

(5) 第8号竪穴建物跡

D区の南端付近において、建物の半分以上が欠ける形で検出されました。カマドは、不明です。

遺物は、建物全体に広がり出土し、土師器坏、須恵器坏・埴・甕・鉢、土錘、鉄釘などが出土しました。

時期は、9世紀後半と考えられます。

(6) 第10号竪穴建物跡

E区の南端において、第11号竪穴建物跡と重複し、建物の半分が欠ける形で検出されました。カマドは北東向きの壁の西寄りに設置されていました。

遺物は、カマド前を中心に建物全体に広がり出土し、土師器坏・甕・甑・台付甕、須恵器坏・埴・皿・壺・甑、流れ込みの磨製石斧などが出土しました。

時期は、9世紀後半～10世紀初頭と考えられます。

(7) 第11号竪穴建物跡

E区の南端において、建物の大部分が第10号竪穴建物跡と重複して検出されました。カマドは北東向きの壁のほぼ中央に設置されていました。

遺物は、カマドの焚き口を中心に出土し、土師器甕・台付甕、須恵器坏・埴・皿・甕、鉄釘などが出土しました。

時期は、9世紀後半と考えられます。

(8) 第14号竪穴建物跡

F区の南端において、第15号竪穴建物跡と重複し、建物の約半分が欠ける形で検出されました。カマドは北西向きの壁の中央部に設置されていました。

遺物は、カマドを中心に出土し、土師器坏・甕、錘などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(9) 第10号溝跡

F区の中央部を東西に横切る形で検出されました。断面形は、丸みを帯びた逆台形で、上面幅約3.8m、深さ約1.2mの大規模なものでした。

遺物は、多数かつ時期幅があり、土師器坏・甕、須恵器坏・埴・皿・甕・壺などが出土し、特殊なところでは風字硯（ふうじけん）が見られました。

時期は、7世紀末～9世紀初頭と考えられます。

4 おわりに

樋の上遺跡は、これまでに幾度となく発掘調査が行われ、古墳時代中期から平安時代に及ぶ集落が発見されていますが、その主な時期は7世紀後半から10世紀前半までの律令制度成立直前から律令制度下です。今回の調査成果は、その状況を補完する意味合いとなりました。

また、今回の調査地点は、遺跡範囲の北縁にあたり、これは地形的に見ても扇状地にある微高地の縁にあたり、集落の形成がこの周辺で限りを迎える現象とも合致し、調査結果が裏付けた好例でした。

集落の形成は、具体的に言うと、上記の地形を巧みに利用していて、中央の調査区であるC区において確認された河川跡を挟んで両側に集落が展開し、東限を河川跡から東へ約130mの谷地形、西限を河川跡から西へ約100mに人工的造られたと考えられる大溝（第10号溝跡）にして形成されていました。

今回の調査により、この地域の飛鳥時代～平安時代の人々の暮らしの一端を垣間見ることができ、住みやすい場所を選んで集落を形成していたことが分かりましたが、その集落の性格は、当時の高級食器である灰釉・緑釉陶器や識字層の存在を想起させる風字硯という特殊な出土遺物が示すように、国家的な施策である大宝律令制度下において、何らかの特別な役割を担っていたとも推定されます。



第5号竪穴建物跡



第8号竪穴建物跡遺物出土状況



第14号竪穴建物跡

平成28年11月22日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）